

Ga-9 肺小細胞癌に対するネオアジュバント療法の検討

京都大学胸部疾患研究所胸部外科

平田敏樹，福瀬達郎，大野暢宏，有安哲哉，室恒太郎，横見瀬裕保，水野 浩，神頭 徹，青木 稔，田村康一，和田洋巳，人見滋樹

目的：肺小細胞癌におけるネオアジュバント療法の効果に対しⅢ期症例を中心に検討した。

対象：1976から90年までに当科に入院した肺小細胞癌症例は102例であった。外科療法を施行したものは42例で、その臨床病期はⅠ期16例，Ⅱ期5例，ⅢA期11例，ⅢB期2例であった。このうちネオアジュバント療法を15例に行いその臨床病期はⅠ期5例，Ⅱ期1例，ⅢA期7例，ⅢB期2例であった。

成績：肺小細胞癌手術例全体の5生率は42%，MSTは29.7カ月であった。臨床病期Ⅰ，Ⅱ期では、術後のみ化学療法施行例の5生率が45.1%であるのに対しネオアジュバント療法施行例の5生率は75.0%と高値を示した。化学療法はおもにPVP療法が行われており、cN2,3症例17例の奏効率は58.8%であった。9例が手術対象となり、根治度は絶治2例，相治2例，相非3例，絶非2例であった。ネオアジュバント療法例では局所再発を認めなかった。

結語：臨床病期Ⅰ，Ⅱ期ではネオアジュバント療法の成績は良好で有効な治療法と考えられた。cN2,3症例では、化学療法の奏効率が低く非治癒切除が半数以上認められ充分なものではなかったが、局所のコントロールには有効と考えられた。

Ga-11 肺癌治癒手術例における術後再発の検討

聖隷三方原病院呼吸器外科

○小林 徹 水野武郎 佐野正明 松井 寛

目的：今回、我々は治癒切除術を施行しえた、肺癌手術例のうち、術後局所再発例および、遠隔転移例に対し、臨床的検討を加えたので報告する。

対象：症例は1986年6月から1989年12月までの期間に治癒切除ができ、術後1年以上経過した時点で再発の有無、および生死の確認のできた62例を対象にした。これはこの期間の肺癌手術例121例の51%にあたる。再発の有無で有りをA群、無しをB群として検討した。

結果：62例のうち、絶対的治癒切除例は42例、相対的治癒切除例は20例で、局所再発や遠隔転移は、それぞれ、8例(19%)、12例(60%)に認められた。この20例のうち局所再発は5例、遠隔転移は13例、共に認めたものは2例であった。組織型はA群B群で、腺癌9例、24例、扁平上皮癌7例、16例、大細胞癌2例、1例であった。T因子では、T1：5例、19例、T2：10例、21例、T3：4例、2例であった。N因子は、N0：4例、30例、N1：5例、6例、N2：11例、6例であった。予後は、A群の13例は癌死、1例が担癌他病死した。B群は癌死はなく36例が非担癌生存していた。

結語：治癒切除62例のうち20例に再発を認めた。相対的治癒切除に有意に再発例が多かった。T因子は、進行例に再発傾向がみられた。N因子は進行例に有意に再発がみられた。B群には癌死はなく、A群の死因は癌死であった。

Ga-10 原発性肺癌切除後の再発に関する検討

久留米大学第一外科

○足達 明、林 明宏、服部隆一、永松佳憲、岩永 大、掛川暉夫

目的：肺癌切除後の再発例で腺癌、扁平上皮癌症例を中心に、再発部位、再発後の生存日数について検討した。対象：過去15年間の手術症例のうち再発部位が明かな132例を中心に再発時期、再発部位、術後化学療法の有無、術後補助療法と再発部位等に関して検討した。予後はKaplan-Meier法にて算出した。

結果：再発例全例の病期はⅠ期40例、Ⅱ期15例、ⅢA期73例、ⅢB期4例であった。これら症例のうち12カ月以内に再発したのはⅠ期47.5%、Ⅱ期66.7%、ⅢA期65.8%、ⅢB期75.0%で病期の進行とともに早期に再発がみられた。しかし、腺癌においてはこの病期間の差は見られなかった。また腺癌、扁平上皮癌両者で再発部位に差は認められなかった。骨、脳、肺、リンパ節再発の比較で、再発後の生存期間には有意な差はみられなかったが、再発後2年以上の生存が7例あり、Ⅰ期症例に多く、再発部位の切除、あるいは放射線療法が行なわれた症例であった。術後の化学療法の有無により再発部位、再発後の生存日数に差はみられず、また1年以内に再発した症例とそれ以後再発した症例間にも再発後生存日数に差を認めなかった。

結果：肺癌とくに扁平上皮癌では病期の進行とともに早期に再発がみられ、再発後生存日数は再発部位、再発時期により差はなく、再発部位の切除、放射線療法により長期生存者がみられた。

Ga-12 Ⅰ期、Ⅱ期肺癌手術後1年以内再発死亡例の検討浜松医科大学第一外科¹、同 第二内科²、藤枝市立志太総合病院外科³○鈴木一也¹、堀口倫博¹、野木村宏¹、小林 亮¹、原田幸雄¹、佐藤篤彦²、関谷 洋³

目的：肺切除のよい適応となるⅠ期、Ⅱ期肺癌のうち術後1年以内に再発死亡する例も未だ多く、その予後の改善が望まれる。これら早期再発死亡例につき検討した。

対象：1989年6月までに切除を行ったⅠ期、Ⅱ期肺癌98例(腺癌52例、扁平上皮癌33例、その他13例)中、術後1年以内に再発死亡を確認した12例を対象とした。結果：術後1年以内の死亡12例中、6例(6/75)がstageⅠ、6例(6/23)がstageⅡであった。Ⅰ期症例中、4例は中分化及び低分化の腺癌で、1例は低分化扁平上皮癌、1例は大細胞癌であった。Ⅱ期症例中、2例が中～低分化腺癌、2例が中～低分化扁平上皮癌、2例が腺扁平上皮癌であった。

再発部位は、対側縦隔、リンパ節転移の2例以外はすべて遠隔転移であり、また、原発巣の脈管侵襲は高度である傾向を認めた。1年以内死亡例と長期生存例で手術の根治度や、化学療法の有無などの差は見出せなかった。また、再発確認後の治療はほとんど無効であった。